

スポーツ行動モデル構築の方向と手順

山本清洋

1. 序—問題の所在—

G.S Kenyon が「今日のスポーツ社会学はその学問的母体が十分でないだけでなく、研究対象の明確な領域設定も十分でない。又、概念や研究の方向性、研究方法に関する諸々の疑問もすでに生じている。しかしながら、最近の発展した諸研究のなかには上記の諸問題をのりこえりと確定できるものをよみとることができる」¹⁾と述べてから数年が経過した。以後今日に至るまでのスポーツ社会学、体育社会学の諸研究を概観してみると、経験的レベルでの研究（調査研究を主体としたものであるが、仮説が理論構築の方向を志向せず、単なる課題解決に重点がおかれた研究）が多い反面、正面から研究方法論や学論に取り組んだ研究は少ないようである。²⁾更に不幸なことには、経験的レベル及び方法論や学論を扱った理論的レベルの両研究領域にもいくらかの諸問題が存在している。経験的レベルの研究では、その研究の諸成果を用いることによって一般理論を構築しようとするよりもむしろ、研究対象である個々の現象の記述・分析の段階にとどまっている。更に、これらの諸研究に用いられている社会学理論やその他の社会科学理論は、どの理論が一般理論を構築するために、最も有効かつ妥当であるかという検討を行うことなく単に研究者個人の興味と関心によって採用されている。その結果として、個々の現象に関してはある程度の記述と分析は達成し得ても、他の現象間との統合をなし得ない現象を生じている。スポーツ社会学は、究極的には社会的事実としてのスポーツ現象に関する一般理論を構築することを旨とする社会科学であるから、帰納法的方法においても常に一般理論を発展させる、あるいは構築するという視点に立って、仮説を構築し、あるいは有効な先験の科学理論を援用したりして、現象を記述・分析することが要求される。

一方、方法論、学論に関する研究をみると多くの研究者が、経験的事実を基にして帰納法的に理論を構築するというだけでなく、経験的事実を認識する為の一般論へと結びつく可能性を持つモデルや分析枠組を構築することが重要であることは主張しながらも現実にはそのような演繹的研究は非常に限られているようである。内容的には、過去構築されたスポーツ社会学におけるモデルや分析枠組はどちらかと言えば、大半がミクロな視点に立脚したものである。すなわち、スポーツを取り巻く諸現象を含めたモデル、分析枠組というよりも、スポーツ集団とかスポーツ行動の構造に関するものであった。もちろんこれらのモデル、分析枠組は、現状でよしと言うのではなく、他の社会・文化的要素をも含めたものへと発展させようという性格は内包している。具体的にその代表的なものを示せば次のようなものがある。

1. 「Classification of Play」, by R. Caillois, *Man Play and Games* (1954)
2. 「Classification of Play」 by J. Huizinga, *Homo Ludens* (1934)
3. 「A Typology of Front Adaptation」, by J. W. Loy, “The Social System of Sport”(1973)
4. 「Conceptual Models of Characterizing Physical Activity」 by G. S. Kenyon, “Research Quarterly”(1968)
5. 「Schematic Diagram of Play System」, 「Cubic Model of Play System」, by H. Imamura *Research Journal of Physical Education* (1974)
6. 「Toward a Structural Analysis」 by G. Lushen. Paper for the American Academy Meeting (1976)

前述したように、スポーツ社会学の目的は社会構造に関連しているスポーツ現象の核である

社会行動に関する一般性を構築することにある訳だから、我々にとって社会構造の構成要素である社会文化的諸要因や他の社会制度（例えば教育・経済・政治等々）を体系要因として内包したマクロな視点からのモデルや分析枠組を構築することも、同時に緊急の課題となる。更にマクロな視点からのモデルや分析枠組は、スポーツ現象（モデルのレベルではスポーツ体系と呼べる）とそれ以外の社会制度を媒介する概念を内包することが要求される。要約するならば、経験的レベルの研究・方法論・学論的研究の両領域にとって最も重要なことは、スポーツ社会学理論を構築するのに、最も適切な理論は何かという視点に立って社会学理論を選択することである。しかし、現代社会学理論の中の一つの理論によって全ての社会現象をカバーすることは困難であるので、我々は現存する諸理論をそのまま援用するというよりも、むしろ社会学理論が形成された方法論構築の過程を参考にしながらスポーツ社会学独自のモデルか分析枠組を構築することが重要である。この例は、社会経済学の中にみることができる。経済行動は社会行動として説明できるので、社会経済現象を分析するのに諸社会学理論を援用することは許されるし、又援用しなければならないが、しかし、社会学理論のみでは全ての社会現象を分析することは非常に困難であるとするのが大方の見方である。*

※ 例えば、富永健一は「社会行動の理論と経済行動との関係は、次のようになる。すなわち、社会行動の理論における命題は経験行動の理論における命題をその一特殊ケースとして包摂するけれども、しかし、経済行動の理論はこの共通部分のほかに、たくさんの個別的な種差部分を有している。社会行動の理論が経済行動の理論を包摂するといっても、後者が前者に解消することはない」と述べる。社会変動の理論、岩波書店、p122 1972

以上の問題意識に立って、本論では、現実のスポーツ現象の分析用具としての枠組の構築、及び、そのことが、スポーツ社会学の一般理論を構築するための一作業となるという2つの意味を内包したスポーツ行動のモデル構築の方向と手順を構造機能分析の立場から仮説として提示してみる。

2. スポーツ社会学における構造機能分析

構造機能分析がある社会学者達によって批判を受けてきたことは事実であるが、一方、構造機能分析が社会構造を分析する手段として極めて有効であることも事実である。この点に関する批判、それへの反批判に触れることは本論の目的でないので、社会学的機能主義の核であるT. パーソンズを批判しているA. W. グールドナーの「The Coming Crisis of Western Sociology」のなかから、「われわれがパーソンズに着目するのは、それが持つ強い影響力のためではなくて、パーソンズ理論の理論としての内在的重要性があったればこそである。というのは、今日の講壇社会学者によって行なわれた仕事のうちでパーソンズの仕事だけが、どんな重要な理論的問題点に関連性をもっているからである」³⁾ 「現在、パーソンズの優越性は失われはじめたけれども、かれは、現代世界における講壇社会学理論の知的な最終ランナーであったし、今日でも依然としてそうである」⁴⁾ という言葉と、パーソンズの学問的性格（例えば機能主義は保守主義的イデオロギーを持つ等）を批判しつつも、それに代りうるグールドナー自身の理論は提示されていない、ことと、今日の日本の社会学理論の中で機能主義が優位である*ことを述べるだけにとどめておく。

※ 社会学講座、東大出版会、1974、及び法社会学講座、岩波書店、1972、の理論編にみるように、基礎的理論は、構造機能分析が主を占めている。その他、現代社会学講座、講談社、1974初版も、同じ流れにある。

スポーツ社会学の領域にも構造機能分析の有効性を認め、スポーツ現象の分析に利用したりモデル構築に利用している人々をみることができる。G. Lushenはその中の典型的な人でありT. パーソンズの行為体系を基にスポーツ行動を再構成し、スポーツ現象（Lushenはそれをスポーツ体系と呼んでいる）と他の社会制度との相互連関を行為の上位体系として規定された

文化体系を通して分析しようとしている。^{**}又、「Toward a Structural analysis —1975—」の中で、スポーツ社会学における構造機能分析の利用について言及し、その視点から分析枠組としてのスポーツ体系を構築することを強調している。

^{**} G. Lushen が、スポーツ社会学の方法論として、構造機能分析を主張している論文として The development and scope of a sociology of sport, AMER. COOR. THE R. JOURNAL 1975, 及び Achievement in sport and the socio-cultural system, 1960 アメリカスポーツ医学会、Atlantaでの発表論文、をあげることができる。

私は基本的には、Lushen の考え方に賛同しつつ同時に、いくらかの疑問も持っている。例えば、彼は「構造機能分析という分脈を離れて、他の文脈からみた場合に、他の人々がスポーツ体系と呼ぶかも知れないことについて留意することは意味のあることである。スポーツの外部システムは、むしろその環境によって決定される。これまでのところ社会学的研究はスポーツ構造の外部システム部分の分析に集中していた……。外部システムと内部システム間の特徴は実際のところ分析的でないのみでなく、ゲーム前、ゲーム中、ゲーム後の ritual は、内部システムの特徴である。そこでは、スポーツの外部の世界は、スポーツの内部の世界から常に隔離されている」と述べているように、一方では構造機能分析的視点からスポーツ体系を構築する必要性を述べて他方では、スポーツ行動は、他の社会行動とは隔絶した異質の属性をその内部に持つものとしている。行為体系の機能的要件は、その体系と他の体系間との相互連関の結果決定されるという前提を持つことを思うときに、前半部分と後半部分とをどのようにして統合するのだろうか。一般的に言えばLushen のモデル構築の方法は非常に秀れたものであるが、上記の問題を解決するためには、彼の言う内部スポーツ体系と外部スポーツ体系、更にはその他の社会制度との相互連関を内包するモデルを構築する必要がある。

只、現段階で諸々の問題点が内在する事が構造機能分析の文脈での研究の有効性を否定するものでもない。上述した、J. W. Roy, H. Imamura, G. S. Kenyon, G. Lushen 等々によるモデル、多々納秀雄の「スポーツ体系論の構想」⁷⁾ は、この文脈上のものであり、その後も継続されて理論的發展が試みられている。この文脈での研究の背後に流れる基本的態度を結論的に言えば、

- ① スポーツ行動に従う過程的な現象（形成—変容—崩壊—再形成）を、集団的接近、制度論的接近、構造論的接近を乗り越えて理解・分析したいという動学的過程的思考、
- ② 科学的説明が、「それは一方では既知の事実に対する情報を記述した体系であり、他方では一般説明の体系である」⁸⁾ と規定され、かつ、体系が、全対を表す諸概念とは異なり、それは部分間（構成要素間）の関係を表す概念であることから、スポーツ現象を総体的、まるごとのまま記述する傾向のある諸研究をのりこえたいという分析主義的思考、
- ③ スポーツ現象の諸構成要素は、全体の中でそれぞれが一定の機能を持ったものとして相互に関連しあっており、その結果として全体をつくりあげているという機能主義的思考（この態度は、優越因子論、決定論歴史法則性の各思考をのりこえる）、
- ④ スポーツ現象の核をスポーツ行動と規定し、その複合体について、上記の態度によって進められた研究は、人間の社会行動に関する諸理論と統合が可能になるという一般論的思考の四思想的態度であるとみてよい。

3. モデル・分析枠組構築の状況

スポーツ社会学の領域で、スポーツ体系やスポーツ行動のモデルを構築した人々として、前述したように、G. Lushen, H. Imamura, J. W. Roy, G. S. Kenyon, 多々納秀雄等々をあげることができる。モデルの名称は第一章で示したとおりであるが、それらは、いずれも「分析手段としての有効性」という見地から発展させる必要性を含んでいるので、更により有効なモ

デルを構築するために、本章ではH. Imamuraの「A Schematic Diagram of Play System」⁹⁾とJ. W. Royの「A Typology of Front Adaptation」¹⁰⁾を手掛にして、それぞれの問題点を構造機能分析の立場から指適してみる。

H. Imamuraは「A Hypothetical Study on the Systematic Classification of Play」の中で、playを行為システムとしてとらえ、システムの構成要素及び構成要素間の関係を理論的に確定し、プレイに関するモデルを提示し、更にプレイの一般理論体系への手掛を探求している。この試みは、R. カイヨウが「プレイの4つのカテゴリー」¹¹⁾を提示したときに理論的な問題点として残された各カテゴリー間の相互関係を、T. パーソنزの行為理論をもとにして、①プレイ体系の位相運動、②構成要素間の静的相互関係の2側面から解決し、R. カイヨウの理論を体系的に発展させている。しかし、次の点が問題点として指適される。すなわち、Imamuraは行為体系の構成要素と手段、便益、目標、価値、動きつけと規定し、更に、これらの各要素はT. パーソنزのA, G, I, Lにそれぞれ対応するという前提から、体系の機能要件として行為の位相空間に生起する行為の型（もちろん、A, G, I, Lのいずれがドミナントであるかによって行為の型は生起する）を構成要素と規定する。この論理は、T. パーソنزが「核家族と子供の社会化」¹²⁾の中で「我々が以前に構成したところの、心理療法にとくに関連した社会統制の図式の4つの構成要素(components)は、〔それぞれ〕大まかな時間的順序に従って顕現するという、そしてその順序つまり、(1)許容(permissiveness), (2)支持(support), (3)相互性の拒否(denial of reciprocity), (4)報酬の操作(manipulation of rewards)は逆の順序でベイルスの諸位相と一致させることができる」¹³⁾と述べた部分に準拠するものであろう。しかし、行為の構成要素として、手段、便益、目標、価値、動きつけを規定しながら、それらが、それぞれA, G, I, Lの各位相に対応するという理由から、位相A, G, I, Lに顕在する行為をプレイ体系の構成要素として定義することで、果して上記のプレイ体系の構成要素を説明したことになるのであろうか。今日では、行為体系の下位体系（これらが構成要素と考えられる）として文化体系、社会体系、パーソナリティ体系、有機体系をあげ、それらの諸下位体系間の相互連関を機能と規定し、更にその構造と機能を維持してゆくことが機能的要件であるとするのが一般的である。とすれば、各位相に顕在する行為体系には常に文化、社会、パーソナリティ、有機体の4つの構成要素が内包されており、それらの相互連関の在り方（機能）によってプレイの型が顕在すると考える方が妥当ではないだろうか。Imamuraの場合、前提としてplayを行為体系として把握しながらも、移相空間に顕在する行為を機能的要件とし、かつそれがプレイ体系の構成要素であると規定するが、機能的要件と構成要素は論理的に同値ではない。位相空間での機能連関（各要素間の連関の型）の結果としてあるプレイの型が顕在化するのであり、「位相パターン」はあくまでもプレイのカテゴリーとし、プレイ体系の構造を下位体系の集合、更に機能的要件は4つの下位体系間の相互連関の型として特定化の方が理論的に妥当であろう。

次にプレイと社会との連関を分析する方法として、R. カイヨウの“社会とプレイの対応”^{**}やD. リースマンの“社会類型と遊び”^{***}を援用して、プレイの型と社会類型の相互連関について述べている^{****}が、例えば今日の日本社会においては、R. カイヨウの分類に従えば、アゴーン、アレア、ミミクリー、イリンクスのそれぞれがドミナントである遊びの全てが、量的にも同じ状態で存在している。この例は、プレイの型は、一社会に同時的存在として顕在化することを表す。社会学的分析から言えばこの4つのプレイの型の同時的存在の意味と更に、それぞれのプレイの構造と機能を社会と対応させたモデル構築が要請されよう。というのは、モデルは、真偽であるか否かというより、現実分枝のための有効性、妥当性によってその科学的価

値が決定されるからである。参考までに、Imamura, R. カイヨワ等の“プレイと社会の対応”と、今後要請される“プレイと社会の対応”を機械的に図式化すれば、表2のようになる。

※ R. カイヨワは、イリンクスとミミクリーがドミナントな遊びが原始社会に、アゴーンとアレナのドミナントな遊びが近代社会に原理的に適応すると述べている。

R. カイヨワ、清水幾多郎他訳、遊びと人間、岩波書店、1970

※※ D. リースマンは社会の類型を述べ、かつ、各々の社会に表出する遊びについて論述している。D. リースマン、加藤秀俊訳、孤独な群衆、みすず書房、1964

※※※ H. Imamura A Hypothetical study on the systematic classification of playのプレイと社会の対応について、図式化すれば、次のようになる。

表1 プレイと社会の対応 (H. イマムラ)

TYPE OF PLAY H. イマムラ	TYPE OF PLAY R. カイヨワ	TYPE OF SOCIETY D. リースマン
Self-satiant type	illinx	Self-directed type
harmonic type	mimicry	tradition-directed type
dedicative type	agon	Inner-directed type
adaptive type	alea	other-directed type

表2 プレイと社会の対応 (山本清洋)

		社 会 類 型			
		自己志向型	伝統志向型	内部志向型	他人志向型
プレイのタイプ	アゴーン	1	2	3	4
	アレア	5	6	7	8
	ミミクリー	9	10	11	12
	イリンクス	13	14	15	16

注) 例として、プレイのタイプをR. カイヨワに社会類型をD. リースマンに従った。

1~16のボックスの中での、それぞれのプレイの構造と機能(プレイ行動の下位体系とそれぞれの連関)を特定化する。

一方、J. W. Loyは「The Social System of Sport : Humanistic Perspective」の中で、スポーツを社会体系として捉え、その構造と機能を提示している。社会体系としてのスポーツの核は、社会行動、特に役割期待行動であるとし、その理念型をFront of Sport (behavioral expectation)と規定する。更に、Front of Sport は、体系の2下位体系(上位の構成要素と考えるてもよい)であるFrame of Sport(スポーツの理想的内容、特にプレイの要素の存在を要件とする)とFormes of Play(スポーツ志向意識、スポーツを構成している精神的要素)の各々の状態の変化に応じて9つのカテゴリーに分類されている。すなわち、Frame of Sportを横軸にとり、プレイヤーがスポーツに手段的な態度でのぞむのか、あるいはプレイ的態度(Humanistic concernという用語を使用しているが、その裏に流れる思想は、J. ホイジンハのプレイ論に近い)でのぞむかによって3段階の尺度を設ける。一方、ゲームは緊張に富み、かつFunを内包するのが望ましいが、このようなゲームの状況は、ゲームの結果があらかじめわかっていないこと、双方の実力の均衡、お互を許し合う信頼感、高度なプレイ、選手のやる気、観衆の態度等々の諸条件に反応して決定されるものであるとし、このようなゲームの状況を、

From of Sport と呼び、それを三段階に区分している。このように区分された各々の構成要素を交差してできる9つのCellが、Front of Sportと規定され、それらが good sport から bad sport までに分類され、それぞれに対応する具体的なスポーツ行動を提示している。

表3 A TYPOLOGY OF FRONT ADAPTATION (J.W. Loy)

		Frame Valences		
		+	0	-
Form Valences*	+	Good-Sport	Game Addict	Hustler
	0	Games man	Agroscopic Agonistic	Spoi-Sport
	-	Cheat	Wet-Blanket	Bad-Sport

* (+)=positive valence
(0)=indifference
(-)=negative valence

J. W. Loy のモデルは、過去、スポーツ行動を社会行動の枠組で操作し、その分脈においてモデルを構築することの必要性が提唱されながらも、具体的に提示されなかったジレンマを破るものであり、モデル構築の方向と具体性を提示した点で画期的なものである。

問題となるのは、彼の立脚する立場が、Humanistic Sociology、いわゆる主意主義的社会学にある点であり、具体的には経験科学という視点に照らした場合に、スポーツの定義が問題として残る。彼は「スポーツとは、人間の意図的思考から分離されているという実在ではなく、人間の主体性が具体化されたものである」¹⁴⁾「スポーツの役割行動とは、自由意志の要素を内在している。すなわち、その役割は自己の表出に反応すべきであり、管理的意図の結果であってはならないし、又自我の強調に反応すべきものでもない」¹⁵⁾ という立場から、Frame of Sport の最上位のランクを理想型として規定する。その結果「企業的手段的干渉がスポーツ社会に侵入する結果、スポーツの表出的枠組(expressive frame)が曲げられてくる。我々は、このような手段的干渉が、スポーツのLudic な構成要素(報酬を期待しない意識)を破壊し、否定している事実を批判したい」¹⁶⁾ と述べる。いわゆる、スポーツ行動の中からのプレイ的要素の減少自主性、自由の減少を理由に手段的スポーツを批判する。

この場合、どのような方法で持って、スポーツの構成要素として規定しているプレイ的要素とか自主性、自発性を測定し、かつ区分するのであろうか。Humanistic Perspective な立場からのモデルであることは解るが、スポーツ社会学が経験科学である限り、構成要素は経験的事実に対応し、かつ検証させうる用語によって規定する必要がある。Loyに従えばGood Sport からBad Sportの9つのFront of Sport があり個人は、そのいずれかに適応する訳であるが社会体系としてのスポーツ行動の構造と機能が、それぞれのFront of Sportの局面でどのようなになっているかは不明確なままになっている。Good-Sport の役割、規範、動機志向等はどのような型を持ち、それらはどんな関連の型を示すか、又他のFront of Sportの場合は、どのようなかを特定化すべきであろう。

次の問題は、Loyが立脚する理論は主意主義的社会学非常に近い。多くのスポーツ現象はそれ以外の社会制度との相互関連の結果生じている訳であるから、彼のモデルを社会体系論的社会学と統合することが要請される。具体的にはFront of Sportと他の社会制度との関連の型を構築することである。

4. モデルの構築の方向

今日の社会学の諸理論（例えば、機能主義理論、闘争理論、象徴的相互行為理論…）をみるときに、それらの間に存在する最も基本的な相違は、それぞれの理論が、社会を把握する場合に個人の側に主眼をおくのか、あるいは社会の側に主眼をおくかに関連して生じている。いずれに位置するかは、それぞれの学者の個人的視点、関心に任されている。その結果、今日の社会学には、一般理論はあり得ないということになるのかも知れない。しかし、我々スポーツ社会学を研究するものは前章において述べたように、先験の学である社会学の諸理論の中、スポーツ現象を分析したり、あるいは分析用具を構築したりするために、いずれが妥当かを選択するという任がある。その為には、個人と社会の関係というだけでなく、他の多くの条件を加えて検討することの必要性は認めつつも、一つのプロセスとして個人と社会という視点のみから、検討を試みる。この問題は個人の目標と社会の目標との関係はどうなっているのか、ということであり、もっと具体化すれば、個人の意志または動機、欲求などは機能分析にいかに取り入れられるべきかという問題になる。機能分析の前提的命題として、①「ある体系の機能的要件の達成は、他の社会体系からの貢献（それは投出、産出の交換によって行なわれる）によって行なわれる」¹⁷⁾ ②「機能分析は社会体系に限らず、パーソナリティ体系、文化体系、およびこれら3つの下位行動体系にも用いられる」¹⁸⁾ そして「このことは、構造機能分析にも同様である」¹⁹⁾ をあげることができる。とすれば、命題①の社会体系のところへは、文化体系、パーソナリティ体系の挿入が可能となり、その結果、パーソナリティ体系と社会体系の機能連関（目標と考えてもよい）が理論的に考えられ、その連関の型を特定化することが出来る。以上のように、個人と社会の関係を、同時に含んだ形で構造機能分析は、その解を持っているとみてよい。この連関の理論的内容は、役割期待、役割行動、両者を一致せしめる統制機能を持つ規範等々を含む役割であることにとどめ、詳細は別の機会に譲る。さて、スポーツ社会学の領域でこの問題を考えた場合、そこには2つの意味が存在する。一つは、主体の欲求を社会体系としてのスポーツ行動にどのように位置づけるかということであり、他の一つは、スポーツ行動の複合体であるスポーツ体系の機能的要件（目標と言いかけてもよい）と、他の社会体系との相互連関の型を特定化することである。この場合、それぞれの体系の機能的要件は、他の体系との相互連関の結果達成されるという前提を受け入れることが必要である。

上述の理由から、構造機能分析に立脚したスポーツ行動のモデル構築の論理的手順きを次のように規定する。

- ① スポーツ行動を、他の体系からインプットを受け、更に他の体系へアウトプットし、しかも、機能的要件が達成されることによって体系が維持される行為体系として定義する。
- ② 行動者としてのスポーツ行動の構成要素を規定する。
- ③ (2)によって規定された二つあるいはそれ以上の下位体系である単位間及び単位に影響を与えている要素間の相互連関の型から、構成されているスポーツ体系を規定する。
- ④ スポーツ体系と、同位あるいは上位体系—例えば、教育体系、政治体系、経済体系、家族体系等—を結合する媒介概念を規定する。
- ⑤ 他の体系の機能的要件と関連させて、スポーツ体系の機能的要件を決定する。
- ⑥ 最後に、スポーツ社会学の経験的研究の諸成果を利用して、システム間の相互連関の型を特定化する。このように規定した手順に従って、モデル構築の2つの方向とそれぞれの方向における具体的手順を示さなければならないが、その前に、スポーツ行動が社会行動の枠組で再構成される理論的根拠及び分析手段としての今日のスポーツ概念の問題点を指適することが必要となる。前者は、すでに拙著「スポーツ行動の概念構築のための基礎作業—スポー

ツ行動と社会行動」²⁰⁾ 及び「スポーツ行動分析の基礎」²¹⁾ の中で詳細しているの、ここでは後者のみについて2・3の問題点を指摘してみる。これまで使用されてきたスポーツの概念は、分析手段の視点から2つの問題を含んでいる。一つは、実体的定義と分析的定義の混同—すなわち、スポーツという用語は一方では現実の行動を意味し、他方では、現実の行動を分析するための分析的意味を含んでいた—であり、他の一つは分析的概念の無批判的構築である。例えば、スポーツ社会学者は、社会体系としてのスポーツという用語を規定したり同時に、文化としてのスポーツという用語をも規定するがこの場合、お互いの用語間の論理的な検討がなされていない。もちろん、概念は研究の目的によって種々に規定されることが許されるものではあるから、同一対象を異った視点から定義づけられる概念が同時に複数存在すること自体は論理的に矛盾することではない。しかしながら、お互いの関係を論理的に明確にしないで、同一対象に関し複数の概念を、同じスポーツ社会学の領域で所有することは一般理論を構築する上で非生産的なことである。

以上の問題を、解決するために、T. パーソンスの文化概念と社会体系としてのスポーツを組み合わせることによって乗り越え、更にスポーツの概念を分析的レベルまで高めてみる。T. パーソンスは、文化は行動の経験的体系の様式ではなく、むしろ概念構成上のシンボリックな意味体系とみなされる、と述べる^{*} 一方、G. Lushen は、スポーツを行為体系の枠組で述べるとすれば、行為としてのスポーツは、4つの下位体系—文化体系、社会体系、パーソナリティ体系、有機体系—によって構成されると述べている。これらの2つの考えを基に、スポーツ行動を分析的視点から図式化すれば図2のようになる。

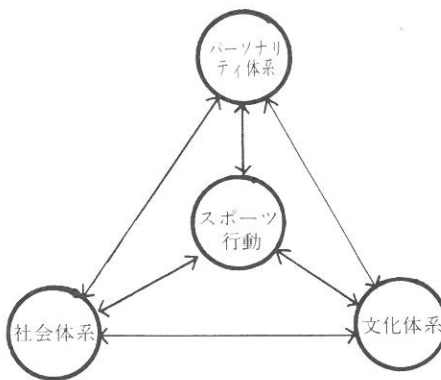
* T. パーソンスの文化に関する考え方は、佐藤勉訳、社会体系論、青木書店、1974、永井道雄他訳、行為の総合理論のちして、Working Paper in the Social Action 1953 等に詳細されている。

又、我々は社会学やスポーツ社会学の領域ですでに次の命題を持っている。

(1) 行為システムのハイラーキー

富永健一は行為システムの下位体系として文化体系、社会体系、パーソナリティ体系、行動有機体の体系の4体系を規定したあとで「これらの4つの行為システムについて、われわれはさきに援用した吉田民人およびBouldingの構相によるシステムタイプのハイラーキー序例と同じ意味で、システムとしてのハイラーキー序例を考えることができる。……4つのシステムの中で、行動有機体が最も低次のシステムとして位置づけられることは明らかであろう。他方、行為の制御（目標による方向づけ）は、選択の基準としての価値すなわち文化体系からくる。これは知性ないし自己意識と呼ばれる人間に固有のはたらきであるから、文化体系が最も高次のシステムとして位置づけられることにも、異論の余地はないであろう。社会体系は、役割を期定することを通じてやはり行為を制御するから、文化体

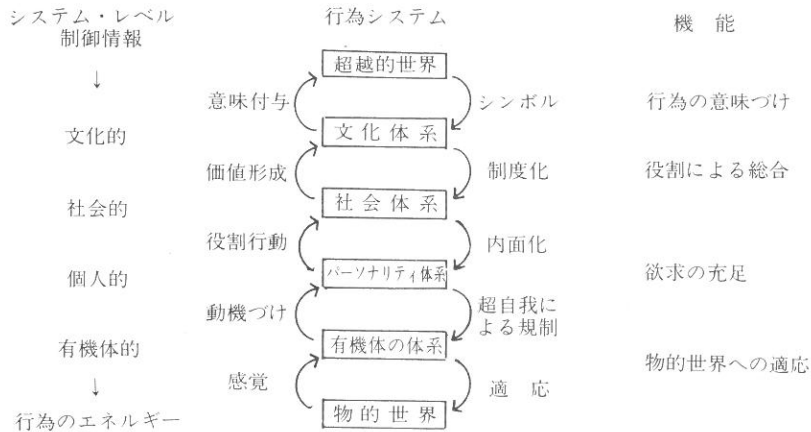
図2 スポーツ行動の分析枠組



矢印は、各体系間の相互連関を表し、それらの結果として、スポーツ行動が生起する。故に相互連関の数とスポーツ行動の数は同数となる。

系について高次のシステムとして位置づけられよう。パーソナリティ体系は、動因プラス社会的、文化的に形成された欲求によって行為と動機づけるから、行動有機体よりも一段上位にこれを位置づけるのがよいであろう」と述べて、図3のように図式化している。スポーツ行動に社会行動の枠組が適用できることから、このハイラーキーの構造はスポーツ行動にも適当できると考えてよい。

図3 行為システムのハイラーキー (富永健一)



(2) 用語としてのスポーツは、文化として規定される。

(1)の行為システムのハイラーキーからわかるようにスポーツ行動は、ある文化体系によって、その体系を維持するために統制を受ける。社会行動としてのスポーツ行動の核は役割行動と役割期待行動であり、この両者を一致させる統制のメカニズムが文化体系である。スポーツ体系内では規範(norm)がそれでありスポーツ体系が、全体社会の中にその存在を補証されるためには、その体系を統制するスポーツの意味が象徴化を経てシンボルとして存在することが必要である。T. パーソンの“文化は行動の経験的体系の様式でなく、むしろ概念構成上のシンボリックな意味体系とみなされる”という定義を受け入れて、実体的定義のスポーツを、シンボルとしてのスポーツとそれに統制される行動の2つに分離し、前者を文化体系として位置づける。

(3) スポーツ行動は、社会体系として記述できる。

以上のことから、これまでのスポーツという概念をスポーツ行動と呼び、“スポーツ行動は、シンボルとしてのスポーツによって統制されている社会行動である”と定義できる。この定義は過去に概念(例えば、実体概念か分析的概念が混合したスポーツという概念、あるいは、社会体系としてのスポーツ、文化としてのスポーツ等)に比べて、分析的レベルが高いとみてよい。その理由として、①実体的概念と分析的概念の分離ができた。②社会体系としてのスポーツと文化としてのスポーツという2つの概念を論理的に統合できる。③定義上のシンボルとしてのスポーツは、スポーツ体系とそれ以外の体系とを連結する媒介概念の機能を持っている…等々があげられる。

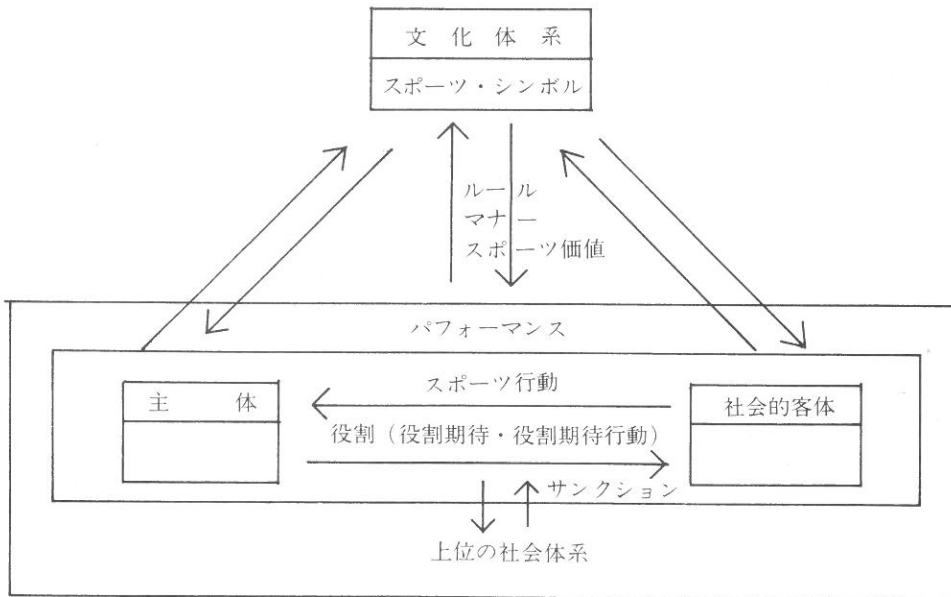
5. モデルの構築の方向と手順

第一の方向は、ミクロな視点からモデルを構成することである。3章でH. ImamuraとJ. W. Loyのモデルを検討したように、Imamuraの場合、4つのプレイの型の構造と機能が不明確であり、Loyの場合、スポーツの構成要素に関して経験的に若干の説明はしながらも、十分に

経験科学としての条件を充たすものではなかった。いわゆる経験的テストに耐え得る構成要素の特定化が不十分であった。というものの、両者のモデルを越えるものを持たない現在、両者の論理的弱点を補強することが、次の新しいモデル構築への道でもある。この文脈上（ミクロなレベル）のモデルは、スポーツ行動の特性（構造と機能）を経験的に検証し得るものへと特定化出来るとともに、今日のモデルを更に分析的レベルへと発展させるという利点を持つ。尚、社会行動としてスポーツ行動を把握したのであれば、すでに理論的に構成された（例えば、T. パーソンの社会体系論）の構造と機能を適応すれば十分ではないか？、あるいは、社会行動とした把握した上で、更に、スポーツ行動の特異性を述べることは論理的矛盾ではないのか？という反論に対しては次の反論が用意できる。社会行動として把握するという事は、社会行動の枠組の適応が可能であることを意味し、その特異性（属性と言いかえてもよい）まで同一であることを意味するものではないから、枠組の適応をはかりながら、かつ特異性の相違を求めるといふことは論理的矛盾ではない。その場合、社会行動に関する一般理論構築という文脈さえ踏みはずすことさえなければ十分である。

さて、上述した部分と4章のモデル構築の前提に基づいてスポーツ行動を、その構築の方向を指示するという意味のみにおいて図式化したのが図4 スポーツ行動のモデルである。

図4 スポーツ行動のモデル (山本清洋)



○ このモデルは、構築の方向を示す意味での大枠であり、各体系の構造及び体系間の連関の特定化をしていない。特定化の結果、スポーツ行動の構造と機能が明確になる。

その特性は次のようになる。

- ① 主体と他者との相互連関は、図5にスポーツ行動の分析枠組として示したパーソナリティ体系と社会体系の相互連関を理論的に具体化したものである。更に、その理論的内容を具体化すれば、2者の相互連関を媒介するものは「役割」であり、それは「役割期待」と「役割期待行動」によって構成される。
- ② 「役割期待」と「役割期待行動」を一致せしめる統制のメカニズムを持つのが、文化体系

としてのスポーツシンボルであり、この連関が、図5 スポーツ行動の分析枠組の文化体系とパーソナリティ体系、更には社会体系との連関を理論的に具体化したものである。この連関は、規範、ルール、マナー、スポーツ価値、サンクション等々によって、調整され、統制される。

- ③ 社会体系としてのスポーツ行動は、開放体系という性格を持つ故に、その構成要素は、具体的には、G. S. Kenyonの言う“The element of sport”のような他の要素も含む訳であるがシステム内にどの要因を取り入れるかは、分析の目的によって異ってくる。只し、このモデルでは、最大の単位が社会体系であることから、システムの構成要素は、必然的に社会的要素（例えば、KenyonのFacilitation, Participation）に制限されてくる。
- ④ スポーツシンボルの構造は、T. パーソンズに従えば、(1)認知的関心の優位な観念的、信念的意味を持つシンボル、(2)カセクシス的関心の優位な表出的意味を持つシンボル、(3)評価的関心の優位な、価値志向的意味を持つシンボルの3つに区分されているが、これらのシンボルは、“Working Paper in the Social Action”にみるとおり、スポーツ行動を除いた、他の経験的社会行動から抽象化された仮説構成体である。このことから、スポーツシンボルの構造及び機能は、スポーツ社会学における諸研究の成果を十分に考慮して、例えば、T. パーソンズの理論をそのまま受け入れるのか、あるいは修正する作業が必要かを決定することが必要である。尚、このことは、3つのシステム間の連関に関しても同様である。

第二の方向は、マクロな視点からモデルを構成することである。3章で検討したように今日のモデルに要請されることは、社会の機能的要件に対応したスポーツ体系の構造と機能の特定化である。H. Imamura の場合、単一プレイと社会の対応関係に論点が集申し、4つのプレイの同時的存在と社会構造との関係が不明確であり、J. W. Loyは、“Sport and Social Structure”で、R. カイヨワのゲームのカテゴリーと、社会構造への適応の類型を利用して、ゲームと社会構造の対応を述べながらも、モデルとしての“Front of Sport”との連関が全く記述されておらず、したがって、社会とのダイアデックな関係と内包したモデル構築に至っていない。

第二の文脈上のモデルは、今日のモデルを修正発展させるとともに、今日のスポーツ社会学の諸領域の研究成果を統合し、一般理論構築への方向づけをなすという利点を持つ。

更に、モデルとしてのスポーツ体系とは、二つあるいはそれ以上の行為単位とスポーツ行動に関与することによって意味を持つ物的客体との連関によって生じる体系であり、更にこの体系は、機能的要件を達成することによって維持される、と規定される。具体的にはスポーツ体系は、第一にスポーツ体系の目標を達成し、第二に社会状況に適応し、第三に体系内の単位間の連関を統合し、最後にスポーツシンボルの統合が維持される。仮に、これらの機能的要件が達成されなかったならば体系の構造は変化するが、そうでなければ新しい体系が生じる、という性格を持つ。マクロな視点からのモデルは、次の手順によって構成される。

- ① スポーツ行動内の構造は、ブラックボックス化し、行動の機能的要件を決定する。
- ② スポーツ体系の構成要素（下位体系）を決定する（体系の構造決定）
- ③ スポーツ体系と他の体系との連関の型を決定する。具体的には、スポーツ体系と他の体系間との「役割」とスポーツシンボル、社会価値の3者の連関型となる。
- ④ スポーツ体系の構成要素間の連関型を特定化する（体系の機能決定）
- ⑤ それぞれの機能連関の形成過程を規定する（体系の変動型の決定）

以上の①～⑤の順序は、お互い関連するものであり、その順に従う必要はない。

マクロなモデルの機能連関も、ミクロな場合と同様、社会体系論（T. パーソンズの社会体系論、あるいは経済と社会等）とスポーツ社会学の経験的諸研究成果とを十分に比較検討するこ

とによって決定することが有効である。

結論にかえて

スポーツ行動・スポーツ体系モデルの現状と問題点を踏えて、モデル構築の方向を示すという意味において、スポーツ行動のモデルを提示したが、残された課題は、提示したモデルを理論的に意味つけてゆくことである。以下、2つのモデルごとに、それぞれの課題を提示して結論にかえたい。

スポーツ行動の場合

1. スポーツ行動を社会行動と規定した場合、一般的には、文化体系、パーソナリティ体系、行動有機体系は、所与となるが、本論では文化体系であるスポーツシンボルを他体系との媒介変数と規定したことから、“社会的相互行為系のモデルとスポーツシンボルの型”との連関を含めたモデルとして、理論的内容を特定化することが、必要となる。
2. 社会的相互行為系のモデルは、理論的内容としては、縦系列の変数が、役割期待、役割行動、勢力関係、価値、規範に特定化され横断面での変数分類が、T、パーソンズのA、G、I、Lに基づくと考えてよい。故に、この縦変数と横変数とをクロスして出来たCellを、スポーツ社会学の経験的研究の成果を取り入れて、特定化することが、次の課題となる。
3. パーソナリティ体系の構成要素（例えば、T、パーソンズの要求性向の型）を析出し、相互連関の型とスポーツシンボルを関連させてパフォーマンス＝サンクションの交換メカニズムを特定化する。もちろん、この場合に、スポーツ行動の逸脱行動（経験的レベルではR、カイヨワのプレイのアレアネーションかスポーツ行動の反則等が想起される）の生起する過程と型の特定化も含む。

スポーツ体系モデルの場合

1. スポーツ体系の目標、他体系への適応、体系内の単位間の関連の統合、スポーツシンボルの統合という4つの機能的要件に関する理論的内容の特定化が課題となる。具体的には、T、パーソンズの「社会体系論」、「経済と社会」の文脈をたどることになるが、一方、M、ミードかB、マリノフスキー、あるいはC、レヴィ＝ストローク等々の文化人類学の研究のなかに、遊びと社会に関する記述を多くみる。上述した4機能的要件のうち、目標、適応の次元の特定化に、かなり重要な手掛りがあるとみてよい。
2. スポーツ行動及びスポーツ体系と他体系との、パフォーマンス＝サンクションの交換メカニズムに伴う、スポーツシンボルの形成過程の特定化が必要となる。この課題の解決は、経験的にスポーツシンボルの準拠する価値体系が、時に社会体系のそれと対峙する故に維持されるという事実、すなわち、スポーツ体系の特異性の解決へとつながるとみてよい。

（尚、本論は1976年Uni・of Waterloo, Canadaでの発表原稿を加筆修正したものである）

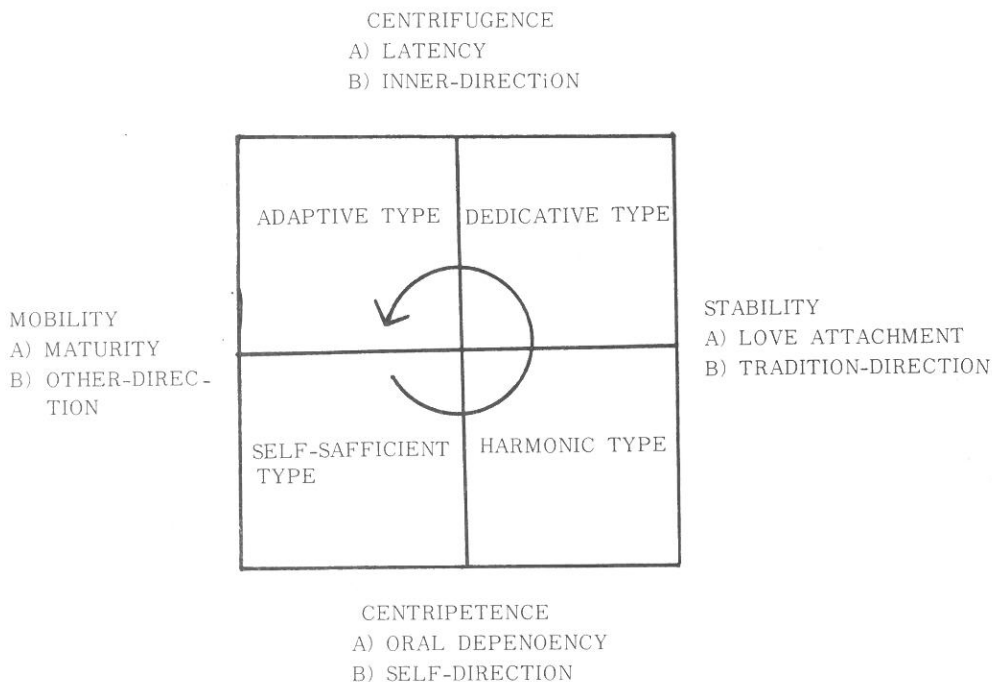
引用文献

- 1) G. S. Kenyon, The sociology of sport, The Athletic Institute, Chicago, p7(1969)
- 2) 菅原 札、体育学研究、第22巻、p7 (1977)
1974年から1975年にわたって体育社会学研究会が内外から収録した総数 804論文中、研究方法に関するわずかに11、総説、原理、一般 199にすぎない。
- 3) 4) A. W. グールドナー、矢吹修次郎他訳、社会学の再生を求めて、新曜社、p5 (1976)
- 5) G. Lushen, Towards a structural Analysis, Paper for the American Academy Meeting,

Milwaukee, p2 1976.

- 7) 多々納秀雄 スポーツ体系論の構想、九州大学体育研究、第5巻第5号、1977
- 8) H. L. セタパーク、安積仰也他訳、ミネルヴァ書房、p11 1973
- 9) H. Imamura A Hypothetical Study on the Systematic Classification of Play, R. J. P. E., Vol. 18 p341 1974

図1 Schematic Diagram of Play System



Key : A) =Parson's division of the developmental stage with age
B) =Riesman's division of the social character. An arrow shows the direction of phase movement.

- 10) J. W. Loy and A. G. Ingham, The Social System of Sport : a Humanistic Perspective, Quest Vo XIX, pp2-21, 1973
- 11) R. カイヨワ、清水幾多郎他訳 遊びと人間、岩波書店、p55 1970
- 12) T. パーソンズ、R. F. ペールズ 橋瓜貞雄他訳、核家族と子どもの社会化、下、黎明書房 1970
- 13) 核家族と子どもの社会化、下、(前掲) p68
- 14)15) J. W. Loy and A. G. Imgham, The Social System of Sport (前掲) pp 6 ~ 7
- 16) 同上 p11
- 17)18)19) 小室直樹 機能分析の理論と方法社会学評論第20巻1号、有斐閣pp20~21 1970
- 20) 山本清洋 体育とスポーツ集団の研究、道と書院 pp207~225 1974
- 21) 山本清洋 スポーツ行動分析の基礎、行動とその構成要素、体育社会学専門分科会資料、筑波大学 1976
- 22) 富永健一 社会体系分析の行為論的基礎社会学講座所収、東京大学出版会 p121 1974
- 23) G. H. Sage and G. S. Kenyon. Sport and Amrican Society ADDISON-WESLEYPUBLISHING CO. p21 1970

昭和53年3月31日受理